UrbanDesignLab.Magazine

vol.257
拡大号
2017
09
30

鞆と研究室、三つの眺望

TOMO AND OUR LAB,
FROM THREE STANDPOINTS

東京大学 工学部都市工学科 ／ 工学系研究科 都市工学専攻 都市デザイン研究室 http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/
編集長：松田季詩子 ／ 編集委員：神谷安里沙 田中雄大 中村慎吾 岡山紘明 但馬慎也 中戸翔太郎

9月3日、7時30分。ふらりと朝の散歩に出かけたら、ライダーズジャケットの素敵な方に出会った。慣れた手つきでヘルメットを装備し、悠々と立ち去る姿は鞆のまちと合わせて1枚の絵画のよう。朝釣りに来ていたのだろうか、それとも通勤か。日常と物語のはざまで。

1章：鞆プロジェクト、波乱万丈。…P.4
2章：松居さん、語る。…P.6
3章：編集部、鞆を歩く。…P.10

9月3日、12時前後。坂は鞆の特徴であるとともに、どこでも利用可能な展望台だ。これらの坂の起伏は海に沈みこんでいって「潮待ちの港」の特徴を生み出し、文字通り鞆の発展と地続きになってきた。長い歴史のなかのほんの一瞬、ここに留まる。

9月拡大号　鞆と研究室、3つの眺望。

プロジェクトと研究室の原風景がここにあった。

都市デザイン研究室がかつて関わった地域の中でも
２０００年から10年以上にわたり取り組んだのが
広島県福山市の南西に位置する港町、鞆である。
鞆は現在１９８０年台後半から続いた埋立架橋計画が
昨年２０１６年に「中止」の形で終止符を打ち、
新たなまちの方向へと舵を切り始めている。

この埋立架橋計画の論争と並行する時の流れの中に
都市デザイン研究室の鞆プロジェクトはある。
プロジェクトでは鞆という町の特徴や魅力、歴史調査から始まり、
道路交通、空き家利用、祭事、生業など様々な調査を行ってきた。
当初、プロジェクトの活動資金がなく、
調査報告を「鞆雑誌」として販売することで資金繰りしていた。
また滞在中は空き家や住民の方の家に泊めてもらい、プロジェクトは進んだ。
とても人情味溢れるプロジェクトであった。

現在、都市デザイン研究室では15のプロジェクトから
学生が自らの興味、関心のあるプロジェクトを選択し、
日々、各地のまちづくりに果敢に取り組んでいる。
9月は夏休み。慌ただしい日々の中で、なかなか目が向けられなかった
先輩方が辿ってきたプロジェクトの軌跡を
のんびりみてみるのも良いのではないだろうか？

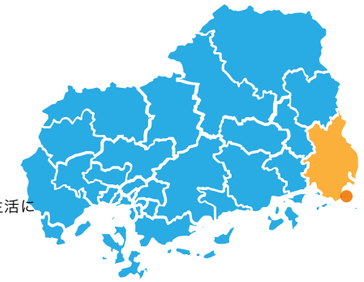
まちづくりの新たな舵を切った、鞆。
人情味溢れるプロジェクトの行われた、鞆。
現在の学生からみた、鞆。

様々な鞆というまちの姿に
３つの角度からスポットライトを当ててみる。

1 鞆プロジェクト、波乱万丈。

鞆 基本データ

住所：広島県福山市鞆町鞆
面積：5.4㎢
人口：4,957 人 (2009)
江戸時代、海運で栄えた港町であり、当時の町並みや景観が息づく。
交通の便をよくするため港に埋め立て架橋を設置する計画が、その景観や生活に影響を与えるとして、行政側と住民のあいだで景観論争が起こった。



7.5 冊の発行物をアンカーに、プロジェクトと鞆の軌跡を追ってみる。

「鞆雑誌」をご存知だろうか。鞆の内外に関わらず、まちづくりに携わる多くの人に届くように実費で販売していたこの報告書を開くと、調査の解像度の高さとともに、自分たちの考えを誰かに届けようとする編集者たちの熱意に圧倒される。鞆と研究室を繋ぐ３つの視点のうち、「当時の都市デザイン研究室の視点」を知るのに、これらの発行物ほど適したものはないだろう。
先人が残した知とことばの集積から、当時の大きなうねりをおさらいしよう。

2013
鞆港の風景を読み解く４つの鍵

2012
鞆の浦と空地
- 空地とともに暮らす -

2011
生業と祭事から
鞆らしさを探る
鞆雑誌❺

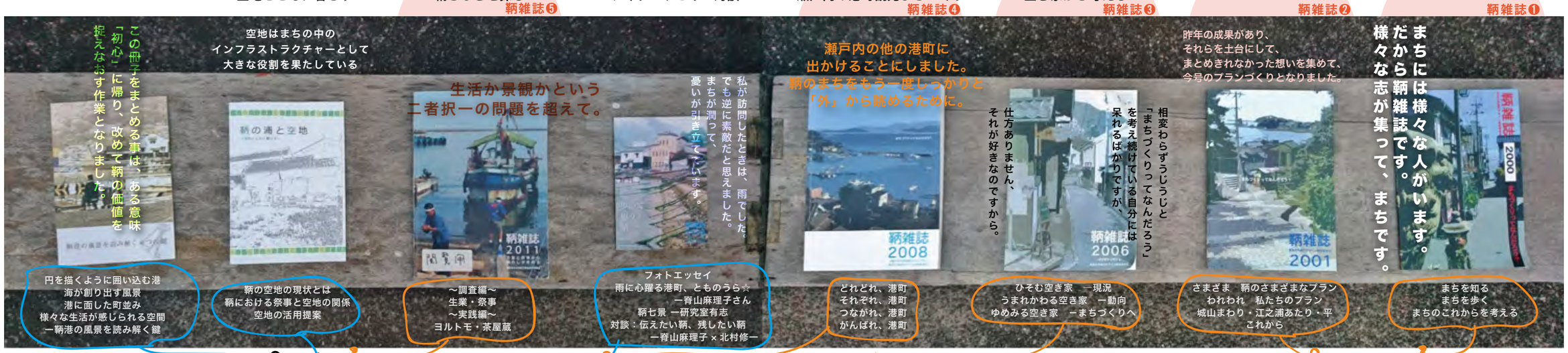
2008 別冊
歩いて憩う鞆
フォトエッセイ＋対談

2008
「まちづくりってなんだろう？」
- 瀬戸内の港町観光まちづくり -
鞆雑誌❹

2006
「まちづくりってなんだろう？」
- 空き家から考える -
鞆雑誌❸

2001
「まちづくりってなんだろう？」
鞆雑誌❷

2000
「まちづくりってなんだろう？」
鞆雑誌❶



円を描くように囲い込む港
海が創り出す風景
港に面した町並み
様々な生活が感じられる空間
―鞆港の風景を読み解く鍵

鞆の空地の現状とは
鞆における祭事と空地の関係
空地の活用提案

～調査編～
生業・祭事
～実践編～
ヨルトモ・茶屋蔵

フォトエッセイ
雨に心躍る港町、もののうら☆
―脊山麻理子さん
鞆七景 ―研究室有志
対談・伝えたい鞆、残したい鞆
―脊山麻理子 × 北村修―

どれどれ、港町
それぞれ、港町
つながれ、港町
がんばれ、港町

ひそむ空き家　―現況
うまれかわる空き家　―動向
ゆめみる空き家　―まちづくりへ

さまざま　鞆のさまざまなプラン
われわれ　私たちのプラン
城山まわり・江之浦あたり・平
これから

まちを知る
まちを歩く
まちのこれからを考える

―凡例―
調査
論文等
ワークショップ
その他

2013
報告書をもって、鞆プロジェクト閉幕。

2012

2011
祭事・生業調査
「ヨルトモ会」

2010
空き家・交通実態調査
祭事・生業調査
茶屋蔵ワークショップ
「土間たたき」「ともボン」
「ヨルトモ 2010」

2009
ワークショップ
「ヨルトモ 2009」

2008
港町交叉展
第9回瀬戸内世界遺産セミナー発表
「ヨルトモ 2008」

2007
粟島、下津井、尾道訪問・調査
全国北前船寄港地自治体アンケート調査
研究論文「北前船をテーマとした広域観光に関する基礎的検討 ―北前船関連観光資源の全国調査を中心として―」

2006
論文「歴史的市街地における低未利用家屋の継続要因と再生方策 ―広島県福山市鞆町を事例として―」
瀬戸田、手結訪問・調査

2005
論文「鞆の浦埋め立て架橋事業に関する中国新聞記事分析」
空き家実態調査
日本大学と「鞆まちづくり博覧会」

2004
日本建築学会設計競技参加
「建築の転生」
空き家再生インタビュー調査

2003
「四つ角の家」再生ワークショップ
日本建築学会設計競技参加「凸凹みち」
IFHP 国際学生コンペ
「Towards a Hosting Portal Town」参加

2002
第4回鞆の浦シンポジウム「港町鞆の浦の再生に向けて」
造景 36 号に計画案「鞆再生への提案」
第25回全国町並みゼミ鞆大会

2001
第3回鞆の浦シンポジウム「鞆の浦の遺産と重伝建のまちづくりを考える」
T-HOUSE 2001

2000
交通量調査
論文「鞆の浦における観光のあり方に関する「考察」」
T-HOUSE
論文「歴史的港町鞆の浦における実践的取り組み」

2001
交通実態調査
IFHP 国際学生コンペ
「Revitalizing Urban Coreless Spaces」佳作

松居秀子さん（後述）が研究室会議にやってくる。窪田助教（当時）をはじめとするメンバーが鞆を来訪し、プロジェクト開始。

研究の意義とともに、助手１年目だった自分には教育の場としても意味があったと思う。決まった仕事をするのではなく、外から来た我々が、何をするか、どう進めるか、なぜ取り組むのか、という点を突き詰める場だった。

「県道とその周りの道路で交通を捌けるのでは？なんらかのソフト的対策―「内科的処置」ができるのではないか？」と、交通量調査を行う。譲りあいの交通やパークアンドライドなどを提案した。

町の中の住民には埋め立て架橋反対派も賛成派（開発派）もいらした。けれど、反対の態度を明確にしていなかった方が、調査グループの泊まっていた江の浦に毎日豆腐を持ってきてくれたりなど、議論をしながらもつながりは生まれていた。

景観は、これまでも鞆調査の焦点だったが、改めて、体系化していくことが求められた。プロジェクトとして論争、裁判に関わる中で、どう戦い、何を提案するかなど、自分たちの役割が明確化していくのを感じた。熱があった。

景観論争がいったん終了し、さらにその背景に踏み込むため、生業と祭りについての緻密な調査を行った。生業は天売りと伝馬船。祭りは７つの町があり、それぞれにどのような祭りがされているかを調べた。沼名前（ぬなくま）神社に着目した。

最近は、研究室プロジェクトではなく、個人でやれる範囲で鞆に関わろうと考えている。過去は対行政という立場だったけれど、最初から 17 年もたって、世代交代も進み、行政の考え方も変わってきている気がする。いまは、鞆の価値を維持した上でいかに公共事業を載せられるかを考えていきたい。

プロジェクトを思い返せば。
長らく鞆プロジェクトを見てきた窪田先生に、年表に合わせてお話を聞いた。

その熱は今も心のなかに
初期のデザ研関係者に聞く

窪田亜矢▼地域デザイン研究室教授▼2000-02.2007-13▼2000年3月から2年間は助手として学生さんたちと密に、いったん離れて、2007年からは准教授として再び関わり、その後、断続的に今に至る▼
あるべきものが必然的にそこにあることの美しさを理解しようと調査し、その美しさを継承する術を検討した。北沢先生部屋に提案書案の全ページを貼り付けて、あーでもないこーでもない、とみんなで議論して「鞆雑誌2000」になった。／鞆は、中心部だけで存在しているわけではなく、隣の平集落や風致地区の斜面地の緑や対岸の島々など、周辺との関わり合いが重要だ。関係者はみんな鞆に良かれと思って必死に行動していることも理解できた。／世界遺産訴訟で大井幹雄さんが様々な思いの中で先頭に立ったことも忘れてはいけない。／そういう根源的な数々を、みんなで学んだ。

中島直人▼都市デザイン研究室准教授▼2000-2009▼・鞆雑誌2000、2001、2006、2008にまとめた調査活動・IFHP国際コンペへの応募（入選・T-Houseをはじめとする成果発表展示・鞆まちづくり工房主催のワークショップ支援（まちあるき、四つ角空き家再生など）・町並みゼミ開催支援・ヨルトモ開催・GCOE（都市工・建築・社会基盤）チームの編成と茶屋蔵調査など）▼
鞆pjでの経験、とりわけ松居さんたちとの出会いは、私のまちづくり観、プロジェクト観の基礎となっています。また、鞆を通じて、陣内先生や伊東先生など尊敬する先生方とのつながりができました。印象に残るできごとは沢山ありすぎるのですが、最初の年、埋立架橋事業推進派の方にヒアリングに行った際に頂いた「わしらの生活がかかっているんだ。お前たちは、ぱっと来てぱっといなくなるんだろう。たいした覚悟もないくせにまちに口出しするのはやめろ」という強い忠告が、後々まで心に強く残っていました。研究室有志、日大生や鞆の浦海の子のスタッフたちとのわいわいがやがやの合宿生活は、私にとって、とてもとても大切な青春の記憶です。

今川俊一▼静岡市企画課▼2000▼ピエール瀧的活動（楽器は弾かないけど、皆に乗っかって、やりたいことを言うほう）▼
自治体から研究室で受託した「与えられたテーマ」ではなく、夜行バスに乗り込んで、地区の人々にお世話になりながら、埋め立て架橋への賛成反対の二極が明確にある地区で、自分たちで０から考える、そのトータルの経験が、現在の仕事の意識的な原点になりました。研究成果（鞆雑誌）を販売して、事業費にするとか、状況的に、そういうことも自然と考えながらやっていました。／研究室の学生主体のチームで動いていましたが、ストーリーを描く人、調査分析が緻密な人、クリエイティブなデザインを提案する人、地元交渉にたけた人、遊び心を乗せる人、自然と役割ができあがっていたような気がして、とても楽しかった。／与えられた義務になることは研究室にも町にもよくはないと思い、鞆pjと呼んでもらえるような継続は望んではいませんでした（それぞれの年で意識があってたまたま続いているのだと思いますが）。／ただ、鞆というのは、それだけ、場の魅力も豊かだし、町の成り立ちや空間、経済や交通、近代化の変化など、コンパクトにいろんなことを体感できる町の一つなんだなとは思います。

田中大朗▼TIT & ASSOCIATES*▼2000-2001▼鞆というまちをよく知り、内外の人に伝えること・鞆雑誌の編集・制作。▼
修士で都市デザイン研究室に入った春に鞆プロジェクトが始まりました。学生が中心となって、何のために何をしていくのか、ということから自分たちで考えるプロジェクトでした。夜行バスで現地に赴き、とにかくまちを歩き、話を聞いてまわりました。何度も訪れ、泊まりこんで、まちの魅力や課題、まちのこれからについてプロジェクトメンバーで議論しました。地元の方々と一緒になって調査したり、夜遅くまで真剣に議論することもありました。今している仕事も、当時鞆プロジェクトでしていたことと同じです。何のために何をしていくのか自分で考え、とにかく現場に入って現地の人と話しながら考える。鞆プロジェクトは私の原点です。

池田晃一▼TIT & ASSOCIATES*▼2000-2001▼―▼
修士課程に入ってすぐ、まずはみんなで行ってみよう！と4月末に夜行バスで訪れたのが最初。以来、2年間でかなりの回数通いました。とてもたくさんの方とお話をし、また、地元の会合にもお邪魔させていただきました。当たり前のことですが、地元に暮らす方々が本気でまちづくりに取り組んでいるのに触れ、鞆の浦の未来に対して自分たちに何ができるのか、一生懸命に考え、地域に関わることの覚悟と楽しさを学びました。鞆の浦を訪れた時は、毎回、研究室のメンバーだけでなく、地元の方々なども一緒に、お酒を飲んだり、バーベキューをしたりして合宿のようでした。町並みを歩いたり、防波堤に座って海を眺めたり、夜の常夜灯広場に集まったり、鞆の浦に滞在することがとにかく楽しかったです。

*2016 年 6 月 242 号（http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/news/_docs/labmaga242.pdf）参照

【凡例】名前▼所属▼関わった期間▼自分がやったこと▼鞆の思い出

2　松居さん、語る。

松居秀子さんに インタビュー

今回は鞆で 25 年以上にわたり、埋立架橋問題や、空き家再生
などに携わっている松居秀子さんにお話を伺うことができた。
松居さんと都市デザイン研究室の関わりや、鞆のこれから、
まちの魅力などを語ってもらいました。

photo1. インタビューを受ける松居秀子さん

初期は、鞆の素晴らしさを再発見するイベント

— 都市デザイン研究室と関わり始めた当初のお話をお聞かせください。

松居：私が活動を始めたのが１９９０年くらいなので、１０年経った頃でした。私の初期の活動は、私たち素人がいろんな人に声かけて、鞆がどんな素晴らしいまちかを再発見しよう、というかたちで、住民、支援の人たち、特に若い人と一緒にイベントをやっていたんです。その中で１９９７年に*1全国町並み保存の大会が、村上市であったんです。その時に初めて鞆の窮状を訴えました。埋立架橋が色んな歴史遺産、環境を壊してしまうということを訴えさせてもらいました。そこには町並み保存の専門家が集まっていて、西村先生もいらっしゃいました。専門家の先生方は私以上に鞆の窮状をご存知で、「鞆の住民が動かないと僕らは手を出せなかった」、「やっと鞆から保存を訴える住民がやってきた」と。そこからまちの保存連盟の支援が始まりました。

２０００年、それが最初の研究室訪問でした

松居：そして２０００年に、西村研究室で、台湾の町並み保存の財団法人楽山文教基金会の代表・丘如華さんが研究発表をするとお聞きして、私自身、丘さんにお世話になっていることもあり、駆け付けました。それが最初の東大の研究室訪問でした。それで窪田先生たちが、せっかく松居さんが来てくれるなら鞆の現況報告をしてもらおうということになりました。その時、鞆はすでに埋め立て架橋が紙一枚のところでどうにか食い止まっていたというところでした。その流れの中で、*2日大の伊藤先生が港湾調査、西村研究室がまちの調査として入ってくれました。西村研究室の位置付けは大学として非常に客観性のある立場で調査をすることになっていました。でも結局私たちが受け入れて、住まいの提供などをするので、埋立架橋の推進派から見たら、東大は反対派で入ってきたんだと見えてしまう。やることは客観性をもってやっていたんですが、事情を知らない住民は調査の中身や東大を反対派として見ていた方もいたと思います。

学生と一緒にコツコツと

松居：過去にまちの調査で学生が入ったことはありましたけど、このように自主的に入ってくることはなかったので、まちにとっては画期的でした。若い人が調査しているよ、何が起きるんだろうという好奇の目がいっぱい注がれていましたね。最初は、「鞆を愛する会」という男性の有志グループも協力しながらやっていきました。だけども、だんだん長くなればなるほど、そのグループの動きもどんどん止まっていきました。結局残ったのは私たち。みんなからしたら、女、子どもがやっていたグループが大学生と組んでコツコツやりおるなという感じでした。

　そして調査結果を学会で発表しました。専門家は素晴らしいと言ってくれました。その内容を鞆でも年に一回シンポジウムを開いて報告しました。鞆の人は多くても約１００人の参加でしたが５年続けました。

　そのような活動が呼び水となり、*3ＩＣＯＭＯＳが動きました。これまでの活動や発表の積み重ねが、客観性を持ってＩＣＯＭＯＳに、鞆は世界遺産にふさわしいと言ってもらうことになったと思います。

　また鞆雑誌は客観的な調査報告書として埋立架橋の裁判に全て出されています。空き家調査はこちらから依頼したり、港町の比較もお互いが協力して何を調査すべきかとかいう感じでやってきました。年数が長い間には、非常に厳しい状態もあったわけですが、これだけのことを東大と日大はコツコツやってくれました。

　裁判の２００９年が、ある意味節目になったと思います。裁判で勝って、事業がそこでストップしますから、そこからの活動はやはり変わってきますよね。あとは、私たちがや

＊１ **全国町並みゼミ**：第 20 回記念・全国町並みゼミ村上大会のこと。全国町並み保存連盟が主催し、毎年開催地を変更しながら、町歩きやシンポジウムを通し、町並み保存の理解を深める。(http://machi-nami.org)

＊２ **日本大学 伊東孝研究室**：地元と共同で、鞆に残る近世の港湾施設を調査し、雁木、波止、常夜燈、焚場跡、船番所が５点セットで残るのは日本唯一であることなどを明らかにしている。参考文献に (Mook 鞆) など。

＊３ **ICOMOS(イコモス)**：国際記念物遺跡会 International Council on Monuments and Sites。文化遺産保護に関わる国際的な NGO。ユネスコの諮問機関で、世界遺産登録の審査も行う。(http://www.japan-icomos.org/index.html)

photo3. 地図を広げたワークショップの風景　写真：鶴岡さん (日本大学)

photo2. 日大ワークショップ「石垣スケッチ」　写真：鶴岡さん (日本大学)

る蔵再生のワークショップを手伝ってくれるとか自分たちで産業を見るとか、ソフト面に入ってきた。調査の方向性も変わるし、祭りに参加しようとか、そういう内容にシフトして、険しい反対の渦を感じることはプロジェクトの後半の学生はなかったと思います。

学生は間接的に住民の心を動かす

— 学生が来たからこそできたことって何かありますか？

松居：もちろんあります。まずは何度も言っていますが学術的に客観的調査によって鞆の歴史的価値が立証されたということです。間接的には若い人が入ると、鞆の若い女の子が動く。その中で親が動く。回りの目も若い人がやることに対して関心を持つ、それと東大というネームバリュー。これを言われるのは嫌かもしれないけど、我々が何かやるよりも、やはり東大の学生がやって来て調査することは、どこかで見ることにつながっていて、直接的にはないかもしれないけど、間接的には人の心を動かしていく力になると思います。大方のどうなんだろうと思っている住民にとっては「やっぱり鞆ってすごいんだろうな」というような徐々にそんな気持ちに舵が切られていく。そういうような見えないところの大きな流れというのは起きてたと思います。

— 学生って地元の方から見るとどういう存在なのかなと不思議に思っています。

松居：立場によっては違うと思いますけど、当時は２割が推進派で、２割が反対派で、後の６割は流動的でした。言ってることはわかるけど黙っておくとか、本当のところはどうなんだろう、とかね。そう言った中で学生が入って来てやるっていうのは、やはり流動者にとっての影響は出てくると思います。だから年に１回、調査したことをシンポジウムで報告していたわけです。そして次にやったのが、「鞆学校」っていって月に一回、もうちょっと学術的というよりももっと目線を落として鞆のまちを見つめる学校を１年通してやりました。この第１回も東大と組んで、まずまちを知ろうということでまち歩きをしました。

　それから日大とは「石垣スケッチ」というのをやったんです。鞆のまちで石垣があるところをスケッチして、巨大な地図に落としていったんです。そうするとそこが大体、歴史的な地区と重なることが判明しました。

　東大は「ビューポイント」というワークショップをみんなで集まって、大きな地図と付箋を使って、景色の良いところを探しました。あとは四つ角再生を１年間やりしました。

　そういう風に難しいことだけでなく、東大も調査の後にワークショップをやっていました。目に見える影響というのはないけど、活動を通してまち全体の、学生や私たちに対する評価は変わってくるわけです。だから少しでも、どうかなと思っている人たちに理解を深めてもらえたらなと思って活動していました。草の根運動って結構大変でしたね。

　まちづくりというのはそれを含めて、いろんな人を含めてやるんだという話です。私たちは自分たちがその中できちっとやれることを一所懸命やって、どこかで気づいてくれればいいんだ、っていう感じでやっているんです。片方で皆さんに協力して進めるものは進めましょうと。ただ、無理をしない。こういうことはお金がかかることなので。

ヨルトモの反響

— ヨルトモはどんな反響でしたか？

松居：ヨルトモの一つの目的は、町の東側に観光客が集中していたので、もっと西側も見てもらいたいと言う願いも込めて、そちらに焦点を当ててやったんですよね。

　しかし、人が来ない場所ということで鞆の人もなかなか協力体制が立てられないというか。難しい部分はありましたが、２年ほどやりました。

　でも今でも住民の方は、夜に集まる所がない、あったらなぁって思ってる方も多いですよ。

photo4. ヨルトモの風景

photo5. 日大が主催したライトフェスタの様子　写真：鶴岡さん (日本大学)

またヨルトモに参加していた学生の阿部くんの子供の名前がテルトモなんだよね。今は函館で勤めているんだけど、彼は蔵の設計とかをしていて、茶屋蔵で結婚式をしたんですよ。奥さんとはここのワークショップで出会ったからって言うて、思い出の地で結婚式をするって。そういうこともありました。

NPOを立ち上げて、空き家再生事業に

松居：西村研究室が鞆で調査を開始して数年の間に、「崖の上のポニョ」（2008）や「龍馬伝」（2010）が出て、裁判の判決が全国版に出て、鞆の浦の名前が知られるようになりました。そうすると町の価値が上がるわけじゃないですか。私たちは2003年に「NPO鞆まちづくり工房」を立ち上げて、空き家再生事業に入ったんです。実践するなかで大きくは歴史遺産を生かしたまちづくりでしたが、そのなかのメインが空き家再生事業でした。東大が空き家調査してくれましたから、その資料を使ったりしながらやったわけです。

西村研究室は東日本大震災などがあったり、日本中でまちづくりに関わる要請を受けたりして、研究室自体に若干余裕がなくなっていたんですかね。他にも、窪田先生が他に移られたり、中島先生も慶応に移ったりと、研究室の中の事情も変わってきていました。それと、これだけ調査をし尽くしてきて、次は何をしたらいいの、となってきて、学生さんは他の地域でのプロジェクトにも参加していたので鞆のプロジェクトに参加する人数も減ってきていて。私たちの受け入れる体制はあったものの、開始から10年ぐらいで終了という形になったかな。はっきりとした区切りはなかったけど、中島先生がいなくなったのが節目かな。窪田先生も時々来たときにごめんなさいね、と言ってくれるのですが、それは仕方ないことだし、鞆も一つの節目でした。

また鞆のまちでは、去年までずっと、埋め立て架橋の進行協議が続いていました。

空き家再生の先進地として

松居：これからも私たちは今まで通りやれることをきちっとやって、積み重ねていく。それを積み重ねていけば形は出てくると信じて行政レベルじゃないかもしれないけれど、民間でここまで空き家再生を40件以上してきました。空き家再生事業の先進地としてグッドデザイン賞をもらったこともありました。

そして今後も実績を積み上げるしかないのでこれからが大事というわけです。

空き家再生することは絶対に不可欠で進めていますけれども、三年前ぐらいから私たちも方向を変えています。

現在までは規模でいうと、ほとんどが小さな物件を借り切ってきました。また範囲でいうと、鞆全体を網羅できないので、伝建地区や、港の周りに絞ってやってきました。すると大きな物件が残り出したわけです。大きな物件というのはやはりお金がある程度無いとできないし、若い人がちょこちょこやって直していける話ではないし。

そこで私たちとしてはそう言った物件をお金を持っていて、古い家や鞆に興味もあって、協力・支援してくれる人に買ってもらおうという動きをとることにしました。

加えて先ほど空き家の見学をご一緒した、社団法人の＊4NOTEさんたちと、現在、政府が行なっている＊5特区で、民泊事業をしてみようかと思っています。NOTEさんがやっているのは古民家再生なんですね。個人の力じゃ出来ないから株式会社とかネットワークとか作ってどんどん全国版に広げていこうと。そういうことでそこに賛同する人を集めた勉強会などをしています。

今日もNOTEの＊6金野さんに鞆の事情をよく分かった上で、「大田家のものを僕らが設計してもいいけれど、地元の設計士がちゃんといるんなら、その方の指導でやりましょう。そうやって地元の設計士を育てることが出来るなら。」って。今日そういう話をして。で持ち主の方も「そうですね」って。だから、専門の方に来てもらうのは安易だけど、地元が育たなければというのはあります。専門家の方々に中に入ってもらって、地元の設計士さんや業者がそれの指導を受けながら、勉強しながら進めていこうという、そういうことが非常に大事だと思ってます。

地元や専門家の方に保存に協力してもらうのと、先ほどみんなで行った空き家を直して旅館にして、今やっている民泊事業を鞆のまちの中に展開しようということを進めています。本来ならもっと借りれる物件があれば早く進むんですけど、何しろ借りられる物件が無いので、今はそれを少しずつ少しずつやっています。

まちづくりは多種多様

松居：今日見学した空き家に関しては、これでいける、となったら事業計画を立てて、プロジェクトを立ち上げて、どういう形かわかりませんが、「株式会社 鞆」とか新しい会社、まちづくり会社か、あるいはそのまま「丹波のNOTE」とするか、そのような組織や事業の運営の話になっていきます。だけど、残念ながらこの鞆には人材が足りていないです。プロジェクトを作って立ち上げても、それを担う人材がいないので、それを誰がやるかという問題が出て来ます。

ビジネスの成立も重要だけど、まちづくりビジネス。やはりただのビジネスじゃなくてそこには哲学がないといけない。どう町を思って、どうしていくかっていう哲学をきちっとしないと、ビジネスだけで走ったら全然違うところに行ってしまう。それは大きな問題で非常に難しいところだと感じています。

今までだって、難しいと言いながら埋め立て架橋も中止しているわけです。でも今後のまちづくりを進める方が難しいです。埋め立て架橋というのは、「反対！」というはっきりとした目的があるわけですから。まちづくりは多種多様ですからね。やはり今回の方が難しい。生き方、住まい方の問題が出てくる。だからそこにきちっと哲学がないといけない。そこまでいけば私は非常にいいものができてくると思ってます。

表面的じゃなくって、「なんか、いいまちね」って感じるまち。だから民度をあげなくちゃいけない。やはりいいまちづくりはそこに住んでる人の民度だと思う。そして若い人が一緒になってやってくれたらいいと思う。そこに手助けして、若い人が会社でも半分ボランティア、半分バイトとかでもいいんですけど、関わりながら、またご自身たちが起業していくという話にもなっていくと思うんですけどね。

学生の力で鞆雑誌のようにこれだけの基盤の調査ができたのだから。今日、NOTEの方が言ったように、その調査結果を受けて何か実施しないと調査していないのと一緒だろうと、冗談ではありますがそういう意見もあります。鞆は調査から実施の時期にきているということです。今まで実施の部分は私たちができる、手作り感の中でやってきたんだけど、手作り感だけじゃ間に合わない、もうちょっと大きなものでやっていかないと。そういう時期になってきたんだと思います。

で、私自身はもう年齢も年齢だから、今まで通りやっていこうと思っています。

また別の動きとして、街並み保存が進んでますから。重伝建のことをやらなきゃいけない。その新しい会も昨年立ち上げています。

photo6. プロジェクト当時の作業風景

鞆は、ぼけぇっとしていられる場所

松居：まちの魅力的なところは、ぼけぇっとしてられるところじゃないですかね。なんていうんだろう、昭和というか古いものがどこか残ったまちなんじゃないのかな。

町内の運動会があるんですけど、未だに「タバコ火つけ競争」とかやってますよ。飲兵衛ばっかりですよ。そんな感じで、ここの町内は大人しいとか、ここの町内は大変だとか、町内でキャラクターが全然違うんです。ビールを朝から飲んで、もう祭りですよね。鞆の面白いところは沼名前（ぬなくま）神社の氏子制度があって、祭りもその中の組織で運営されているため警察が出ないんです。私は当たり前と思っていましたら、ある人が秋祭りの時に「警察が出ないんだ！」と驚かれてました。それは町の若者頭が町内にきた車や人の道案内をする。喧嘩もありますけど警察を呼ぶことはない。祭りも男性社会で男性が表に出て、女性は裏でやる。それもまだ残っている。神事なんかは表の舞台に女性が上がることはできないんです。そのように鞆は、まだ昔からずっとある、「そこらへん」が受け継がれる、というよりは残っている、ところなんですね。

最近はつい、安全、安全で、何かいろんなそういうものの面白さを全部取っている気がします。この間ポルトガルに行ったんですけど、旧市街地の狭いところを電車が抜けるように走るんです。あとは東南アジアでトゥクトゥクってあるでしょ。あれも、絶対日本だったら許可されないなって思います。だけどスリルがあって、まちなかだと面白いよね。日本は安全、安全って、それはいいんですけど、なんだか面白さをどんどん取ってる気がします。なんか違うんじゃないかなって。何かもっと余裕をもって、許されるものがあってもいいんじゃないかって。一辺倒に規制しちゃうっていうのはどうなのかなって思います。

無駄が美をつくってる

松居：あと、合理化でまちづくりや建築が起こっていて。空間を潰してしまいますよね。例えば、床の間にしてもそうですよね。考え方によっては無駄な空間だし。でも日本の文化って無駄が美を作ってるわけで、それが現代の効率化でやっちゃうと、床の間もいらないよと。そうすると、軸の文化も無くなるし、花の文化もなくなっちゃう。床の間一つを取るだけで、いろんな文化がなくなっちゃう。どこか壁にかければいいだけかもしれないですけど。

だからまちづくり、まちの建築にしても、そこの視点を失うと、無味乾燥な味の無いまちが出来てしまいます。無駄な空間がいかに大切かという視点がいるんじゃないかと思うんです。

日大が一回「ライトフェスタ」のワークショップを行いました。港の雁木、波止の先まで明かりを灯して、この空間がいかに鞆にとって大切かというのを2000年から3年くらいやったかな？

その意図はなかなか通じないとは思うんですけど、学生が20人位いて、それの準備をみんなで手伝って、菜種油とか入れて、大変でしたよ。その意図を鞆の人たちにわかってほしい、ってやってましたよ。

その後、鞆の地元の人が引き継がせてくれって言って、お願いしたんだけど、2年で終わっちゃいましたね。持続っていうのは大変。過去やったことはやらないじゃなくて、改めて鞆の魅力を見せるワークショップもあればいいかなって思います。鞆の魅力というのは、「港のすごい無駄とも思える空間」。業者はそれを無駄と思えるから橋をかけようとしたんですけど。そうではないんだと、その空間を満喫して、わかっているのが浜辺の後背地に住む元町の人たちですよね。だから反対をすごいしたんです。浜は自分たちが先祖から受け継ぎ守ってきたんだと。彼らにとって浜を埋め立てられることは首を絞められることと同じ感覚です。そのくらいの誇りと思いで彼らは生きていると。だからこそ彼らは自分たちの誇りと生活を守るために闘ってきたのです。そのくらいの思いでやっていこと理解しないといけないんじゃないですか。

photo7. インタビューは和やかに進んだ

―そのあとも松居さんの話は続いた。

私が松居さんとの対話で感じたことは、長年まちづくりを牽引してきた逞しさと、何よりも鞆への愛情だった。（編集：岡山）

松居秀子：鞆生まれ。埋立架橋問題を受けて、1990年から鞆の町の魅力を再発見するワークショップなどを開催。2003年から「NPO鞆まちづくり工房」の代表として、空き家再生事業や歴史遺産の活用、魅力発信を続けている。

＊4　**一般社団法人 NOTE：**2009年設立。兵庫県篠山市の歴史的な市街地や集落を中心に、古民家再生事業や、マルシェの開催など、多方面に活躍している。(http://plus-note.jp/note/company/history.html)

＊5　**伝統的建築物活用特区 (2013)：**歴史的建造物の維持、活用のために宿泊、レストラン、カフェ、芝居小屋、ギャラリー、物販、シェアハウス、福祉施設など現代社会 ニーズに対応した施設として幅広く活用が可能にするよう用途や建築基準の緩和が適用される政策。(www.mlit.go.jp/common/001040947.pdf)

＊6　**金野幸雄：**一般社団法人ノオト代表理事。

Step1.

プロジェクトの痕跡を辿る

鞆の交通量

2000年に行われた交通量調査。現在も街路の隙間で車の混雑が見受けられる。

雁木工事中

茶屋蔵カフェの前面の雁木は現在工事中。白い壁があるのとないのでは雰囲気はだいぶ異なるだろう。工事が早く終わることを祈る。

沼名前神社

鞆雑誌2011では沼名前神社で行われる祭りの調査を行った。クランクのある参道を抜け長い階段を登ると、荘厳な建築が迎えてくれた。

3　鞆を歩く。

９月２日、３日に都市デザイン研究室の現役メンバー７人で鞆と江の浦を訪れた。実際に町を歩くと豊かな港の風景、人情に癒され、感動的な時間を送れたようにも思う。そんな町歩きを３章立てで紹介する。

撮影：松田 季詩子

Step2

鞆の空き家

２日目の午前中、松居さんのお誘いで、NOTEの金野さん、建築家の才本さんと３件の空き家を見学することができた。鞆では現在までに空き家の再生を40件以上行っており、空き家再生もまちの特徴の一つと言えるのかもしれない。金野さんからは空き家再生の利回りなど興味深い話を聞くことができた。見学した３件の空き家の今後に注目である。

photo1.　一件目空き家の入り口。カウンターと土間空間、少し高い天井高。

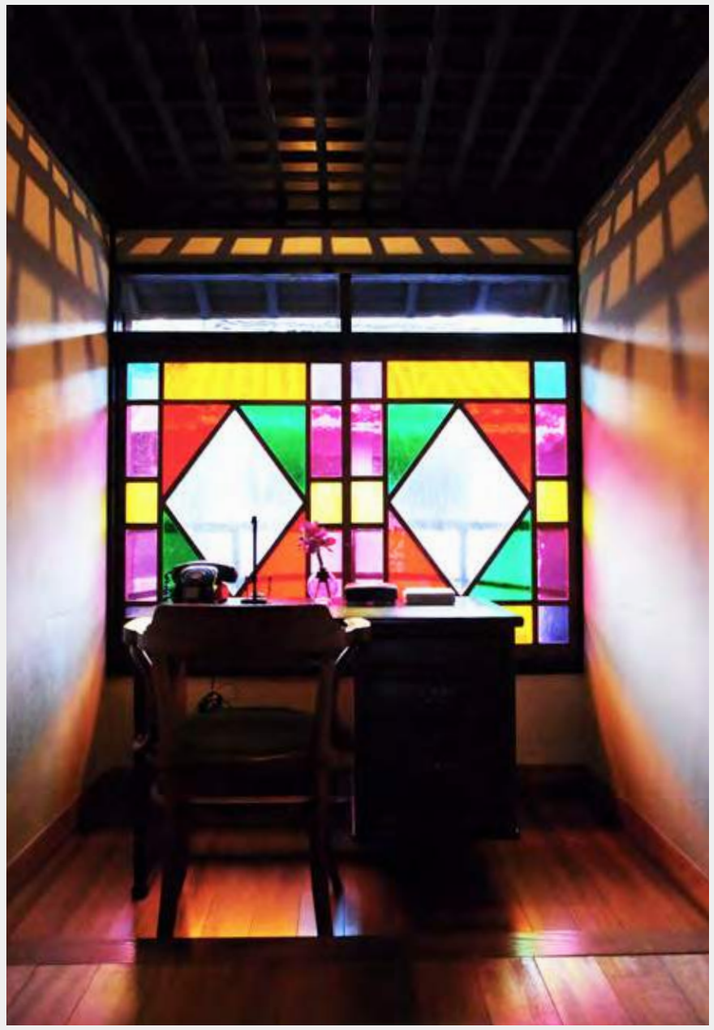
photo2. 一件目２階和室。南面からの日差しが印象的。傷んた建具は交換か。

photo3.　二件目玄関先。広々とした土間。太田家住宅に隣接した好立地。

photo4.　二件目玄関先。天井が抜けて吹き抜けに。トタンの壁が見える。

photo5.　３件目和室から縁をみる。庭木を剪定すると海が一望できる。

photo6.　街角で金野さんのお話を聞く。改築された空き家を思い浮かべる。



空き家から おもてなし空間へ

NPO鞆まちづくり工房が携わった空き家再生事業の一つであり、松居さんが経営する「お船宿 いろは」に宿泊した。「いろは」は幕末、坂本龍馬がいろは丸の事件の際に滞在した場所といわれている。また建築物のコンバージョンデザインには宮崎駿も関わっている。１階はランチを提供するレストラン、２階の宿泊スペースは書斎や応接スペース、屋根組みが見える部屋もある。１階の飲食スペースは鞆の空き家再生を運営する人々で集まる場としても利用されており、今回松居さんのインタビューを行ったのもこの場所だ。宿泊客をもてなす場。町のことを考える場。鞆の風景を今へと紡ぐ場。「お船宿いろは」は新しい風を吹き込み、鞆の町の印象的な場となっている。

2
3
1

写真１. 二階廊下突き当たりの書斎スペース。/ 写真２. 一階玄関から建物正面奥を眺く。/ 写真３. 二階の窓から中庭を眺く。

いろはで舌鼓

初日の夜は、近所のおじさんが釣り上げた黒鯛をＭ２三文字が捌き、刺身とあら煮で堪能した。

朝食は鯛茶漬けを含めた豪華な料理が振る舞われ、鞆の食を存分に満喫した。

写真上：いろは１階にて夕食を囲む。写真右下：黒鯛を捌く三文字。写真左下：黒鯛の刺身。

いろはビフォーアフター

コンバージョン以前は魚屋萬蔵宅の空き家となっていた建築物。シャッターや建築物の前面に壁など、内外装共に近世とは程遠いデザインだった。

step3

鞆 満 喫

鞆の港町が私たちを迎え入れてくれた。近世の港湾の要素や歴史的な町並みを色濃く残す鞆を歩いて実感したここならではの風景を切り取って紹介する。また、下段は町を歩いたメンバーそれぞれのお気に入りの写真が並ぶ。

円福寺の近くの坂
：鞆は海から山が近い。そのため斜面が多い。ちなみに宮崎駿は滞在時この付近に住んでおり、医王寺まで散歩で毎日のように歩いていたという。

街路

古い町並みが楽しめるのも鞆の魅力の一つである。重要文化財の太田家住宅や石畳の街路、江の浦の生活風景が色濃く表出する路地や急峻な坂など様々な表情を見せる。

鞆の中心部の街路 street

江の浦の路地
：江の浦の路地ベンチや洗濯機が道に出ており生活感が溢れる。勾配もついており、迷路のように複雑な空間となっている。

焚場に面した村上製パンの店の裏
：町の運動会のパン食い競争でパンを提供するパン屋の店の裏には絶景がある。焚場の雰囲気と鞆の海とが両方楽しめるのんびりとした空間。

医王寺からの眺め
：気づかないほどさりげなく、海も船も溶け込んで、鞆の色になる。(田中)

中心部の街路
：杉の荒い木目が覆いかぶさる感じとか、細い隙間から海と空が同じ量だけ見えてるとか。(小林)

村上製パン所とその裏：
細い長屋の中を通ると裏に海が広がる贅沢空間。(三文字)

雁木で釣り gangi

港の風景

鞆には近世の港湾の要素が揃っている。横浜や神戸のアーバンな港もかっこいいが、鞆でしか味わえない港の風景もたくさんある。

焚場 tadeba
：木造の船を利用していた時代、防虫のために船を焼いた場所である。埋立計画も出た場所である。

灯篭 tourou
：灯篭は鞆のランドマーク、その周辺はまさに広場だ。瀬戸内海が見渡せ、観光客で賑わい、夕方には近所の方が雁木に座っておしゃべりする。

波止 hato
：海を見渡せば必ず目に入る波止。石で積まれ、迫力十分。波止からの景色は絶景。瀬戸内海を一望でき、鞆の町もパノラマで観られる。

福禅寺 対潮楼とそこからの眺め
：絵と見まごう絶景。吹き抜ける風。心地よい眠りが訪れました。(神谷)

雁木でおじさんが釣ったチヌを調理する
：よさげな写真はマガジンに捧げてしまったので、ここでは板前に敬意を表したい。(松田)

灯篭の夜景
観光客が去ったこの場は忽ち地元民の溜り場となり、独特の雰囲気を醸し出す。(中村)

今回、鞆を３つの視点から見てみた。

先輩方の寄稿からは、各人の個性が溢れた文章の中に、当時の高揚感や厳しさ、充実感、
様々な感情と経験が散りばめられていた。
プロジェクトに関わったことが、血となり肉となってきたのではないかと思った。
身の引き締まる素敵なご寄稿をいただけたと思っている。

松居さんへのインタビューでは、
鞆プロジェクトの経緯やまちづくりを進めてきた中での
エピソードを生々しく、みずみずしく、
実感を持って聞くことができた。これからの鞆に対する構想も聞くことができ、
松居さんや住民の方の一つ一つの行動がこれまでの鞆の町を積み上げてきたし、
これからの鞆の町を作っていくんだろうなとひしひしと感じた。
そんなことを思いながら何かしらの形で鞆にこれから関われたらいいな、
と少し妄想を膨らませてみている今日この頃である。

実際に鞆を歩いてみて思ったのは、鞆はワクワクとのんびりが同居する町であるということ。
山と港も同居しているし、古い寺社とリノベーションされた町家も同居している。
狭い路地と真新しい青色のペイントが施されたゆとりある幅員の道路も同居している。
鞆の町は町並みをタイムカプセルのように閉じ込めておくのではなく、
どこか踏襲しながら、少しづつ時代に合わせて変化している町だ。
そんな町の積み上げてきた歴史が滲み出ているからこそ
ワクワクするし、のんびりできる町なのではないだろうか。

瓶ビールの箱を裏返して道端で話すおばあちゃんたち。
灯篭の下でストレッチをする歴史に詳しいおじいちゃん。
「昼間に働いて、夜は休みましょ」と、にこやかに話す松居さん。
人情味溢れる町、鞆は健在である。

拙い雑誌となりましたが、最後まで読んでくれた、読者のみなさま。
そんなみなさまに訪れてほしい場所です。
（文：岡山）

Special　Thanks　（敬称略）

松居　秀子　　中島　直人　　窪田　亜矢
今川　俊一　　田中　大朗　　池田　晃一
三文字　昌也　　小林　里瑳
田中　雄大　　中村　慎吾　　神谷　安里沙

編集

岡山　紘明
松田　季詩子　　中戸　翔太郎

鞆を歩いて

鞆。いいまちなんだろうということは想像できたのですが、行ってみて、「まちの良さ」を守る様々な努力を目の当たりにできました。なるほど、これこそ地元の人や研究室の長年にわたる成果なのだろうと、しみじみ感じ入った次第です。個人的には常夜灯前で釣ったチヌ（クロダイ）をくれたおじさんに感謝してもしきれません。美味しい刺身と煮付け、最高でした。

（三文字）

バスを降りた瞬間、潮の香りが体を包む。けれど音はなく、とても静かでゆっくりとした雰囲気。鞆に着いたのは、日沈後の夜になるまでの間で、刻一刻と水面に映るまちの光が強まっていく。こぶのある地形もそこを縫う狭いみちも内湾のゆるやかな弧が受け止めている。鞆のこれまでのまちづくりの経緯を聞いて、今、目の前にある鞆の風景を見ることができて良かったと単純にそう思いました。

（田中）

2度目の訪問となった鞆の浦。改めて歩いてみると、入江のスケール感、建物の密度、文化資源のちらばり、いずれを取っても素晴らしく、再びの感動を禁じ得なかった。しかし、その素晴らしさを万人と共有するのは難しい。架橋問題は、まちづくりにおける正解のない価値判断をいかに乗り越えるべきなのかという、大きな問いを我々に投げかけたように思えた。

（中村）

鞆の浦の余白の豊かさ。旅先では色々見ねばと忙しなく動き回りがちなのですが、波止場の先、後山山荘、福禅寺対潮楼、パン屋さんの裏など。只々海を見ていたい。何もしたくない。でも何もしていなくても心が満たされていく不思議な場所があったことが印象的でした。何もない、でも場所によって違って見える海をひたすら眺めるのもいいですね。

（神谷）

次に行くとき、鞆には山腹の家を借りたい。雁木から日がな釣り糸を垂れる。朝と夜には町の息遣いから離れることで、その結晶を景として眺められるだろう。私が「鞆の人」になりえないとき、一抹の寂しさがそこにある。でも松居さんの言葉に甘えれば、これも鞆のまちづくりに包含されていてほしい。とはいえ、晴耕雨読は夢のまた夢、保命酒の買い込みあたりが現実的だ。

（松田）

色んな人や物や目に見えない文化が滞留した何処かに往くのを見て来た小さな街だから，手に収まりそうな鞆の湾が，深く広く見えた．
福山の駅前に降り立った時に，あれは幻だった気がするくらい時空間に広がりを持っていておそらくとの時代にも変わらないであろう夏の，涼やかなお菓子みたいな鞆の雁木と波打ち際の色だけが強烈に残っている．

（小林）

Information

Project Headlines -PJ 近況早わかり-

Web 記事もご覧ください。http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/▸

Archives - 9 月の web 記事

09.01-

2017 年度日本建築学会大会

今年の建築学会の様子を森助教が報告。デザ研 OB・OG による大懇親会も。

09.04-

カトマンズ現地調査

10 日に渡るカトマンズ現地調査を、新 D1 濱田が報告。

09.12

拡大するヘリテージプロジェクト！

高島平の歴史を追うヘリテージ PJ、今回は第 3 回。その様子を M1 但馬が報告する。

09.23

本郷のキオクを語り聞く会 2017。

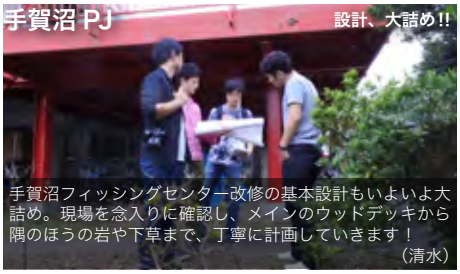
本郷の昔と今の話を地元の方々に伺う@鳳明館。本郷のキオクの未来 PJ の M2 三文字が報告。

09.27

上野・副都心協議会！

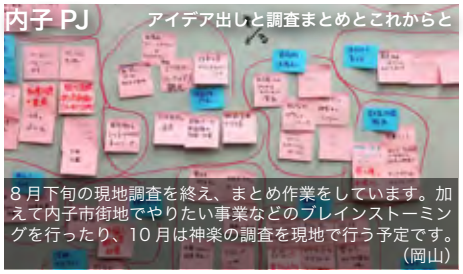
賛否両論･忌憚ない意見が飛び交った副都心協議会、上野 PJ の発表の結果はいかに？

Hey listen, - ちょっと聞いて！-



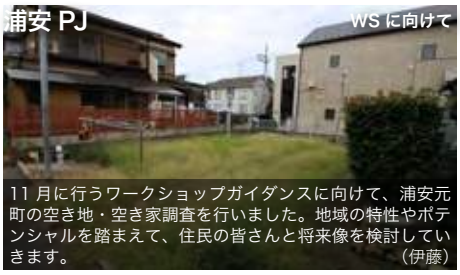
手賀沼 PJ 設計、大詰め!!

手賀沼フィッシングセンター改修の基本設計もいよいよ大詰め。現場を念入りに確認し、メインのウッドデッキから隅のほうの岩や下草まで、丁寧に計画していきます！（清水）



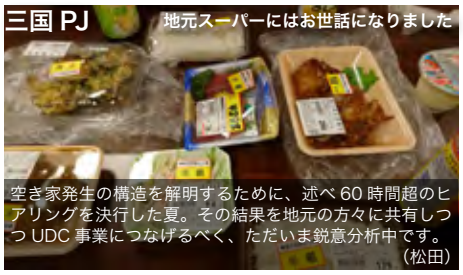
内子 PJ アイデア出しと調査まとめとこれからと

8 月下旬の現地調査を終え、まとめ作業をしています。加えて内子市街地でやりたい事業などのブレインストーミングを行ったり、10 月は神楽の調査を現地で行う予定です。（岡山）



浦安 PJ WS に向けて

11 月に行うワークショップガイダンスに向けて、浦安元町の空き地・空き家調査を行いました。地域の特性やポテンシャルを踏まえて、住民の皆さんと将来像を検討していきます。（伊藤）

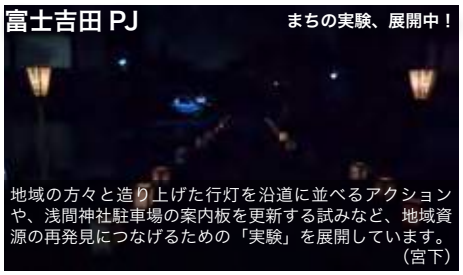


三国 PJ 地元スーパーにはお世話になりました

空き家発生の構造を解明するために、述べ 60 時間超のヒアリングを決行した夏。その結果を地元の方々に共有しつつ UDC 事業につなげるべく、ただいま鋭意分析中です。（松田）

佐原 PJ 次世代へのバトンづくり

高校生中心のまちづくり活動が今後佐原に定着することを目指して、プロジェクトで得た知見を現地の方々と共有するべく、近年の活動を報告書の形にまとめています。（神谷）



富士吉田 PJ まちの実験、展開中！

地域の方々と造り上げた行灯を沿道に並べるアクションや、浅間神社駐車場の案内板を更新する試みなど、地域資源の再発見につなげるための「実験」を展開しています。（宮下）

小高 PJ ひまわり、満開。

原発避難の影響で耕作放棄地になってしまった場所にひまわりを植えて、その中に迷路を作る取り組みのお手伝いをさせていただきました。多くの人が迷路を楽しんでくれました。（新妻）

Schedule for Next Month -10 月の予定-

- 9/28-30 10/1 高島平社会実験
- 10/9 三国 WS
- 10/17 第 7 回研究室会議
- 10/?? 浦安
- 10/?? 上野・協議会

マガジン版 自著を語る 西村幸夫

小樽の峯山富美さんと、1995 年

『都市の風景計画』・『日本の風景計画』

両書とも「西村幸夫＋町並み研究会」の編著となっている。町並み研究会とは研究室内外の有志と小出和郎氏を中心とした都市環境研究所の有志のメンバーが集まって 1994 年から不定期で議論をしてきたゆるやかな組織だった。議論の成果は当時先鋭的であった雑誌『造景』にシリーズとして発表してきていた。その成果をまとめたのが『都市の風景計画－欧米の景観コントロール　その手法と実際』（学芸出版社、2000 年）である。欧米 6 か国をそれぞれ専門にするメンバーが中心となって執筆している。

日本の景観を良くするための方策が主たる関心だったが、新しい施策を提言するためには、日本の施策を相対化してみる必要がある、ということで海外事例をその運用にまでおりて調べた成果をもとにしている。景観というといかにも操作的に見えるので、文化的含意を込めて「風景」とした。Landscape が欧州の 1990 年代の主要な関心事であったこととも呼応している。韓国語版（2003 年）と中国語版（簡体字、2005 年）も翻訳刊行された。

幸運にもこの本の売れ行きが良かったので、念願の『日本の風景計画―都市の景観コントロール　到達点と将来展望』（学芸出版社、2003 年）を刊行することができた。執筆陣もさらに膨らむこととなった。時あたかも景観法（2004 年）前夜である。執筆準備の段階で、日本でも法制化が進むかもしれないということになり、最終の第 13 章に「これからの日本の風景行政への 13 の提言」を執筆した。私が書いて、小出さんが若干加筆する、というスタイルをとった。

感慨深いのは、ここで提案した１３のうち基本法制（本書では「風景基本法」と表現していた）や法定計画（同「風景計画」）、重点地区やデザイン審査制度の導入などかなりの部分が大なり小なり実現したことである。もちろん本書だけの手柄ではないが、出版のタイミングが良かったこともあって、時代を動かすことに一定の役割を果たしたのではないかと思っている。一冊の本の提言がこのような形で実現するということに、時代と並走しているという実感を持ったのはたしかである。私自身、当時はいろんなところから原稿を依頼され、大変だったことを記憶しているが、理想の実現に一歩でも近づくためのことなので、苦ではなかった。

共著者とのコラボは、このあと、景観規制の根拠に迫るための原論である『都市美―都市景観施策の源流とその展開』（学芸出版社、2005 年）や近年の『都市経営時代のアーバンデザイン』（学芸出版社、2017 年）にまで受け継がれている。

▲上梓された『都市の風景計画』・『日本の風景計画』。韓国語・中国語版も発行されている